
天使と悪魔と俺と

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と悪魔と俺と

【Nコード】

N1780L

【作者名】

紅の雲雀

【あらすじ】

主人公は多重人格者になった。

詳しくは主人公 達也たつやの中に天使と悪魔が乗り移ったからだ

天使たちの目的はこの下界の幽霊が天国や地獄にも行けず暴走した姿「霊獣」を浄化させるため。

天使と悪魔と出会いと（前書き）

初投稿です、まだまだ下手ですがかんばっていきたいと思います！

天使と悪魔と出会いと

「ねえ、あつ君ここが下界だよね！」

「ああそうだがせれがどうしたか、てん」

「いや、下界に来るのは初めてだからね」

「俺たちの目的ちゃんと覚えているんだよね」

「うん、ちゃんと覚えているよ確か霊獣を浄化させるんだよねでもその前

に僕たちと契約する人を見つけなくちゃね！だれにする」

「そこら辺にいる奴でいいんじゃないかねーの、ほらそこで間抜けそうながキで

いいよ」

「あつ君そんな適当に決めちゃダメだよ」

「のろのろしてるところがちが危ないぜ実体化が解けちまう」

「あつ、ちよつと待ってよ」

「あ、今日の授業も疲れたな、何か良いことないかな。ま、あるわけないけど」

俺の名前は沢田^{さわだ}達也^{たつや}

そこらにいる普通の中2だ、別にイケメンでもブサイクでもない普通の

中学生、テストをやっても平均点ぐらい、全て普通だらけの日常だった

あの日いつもと違う行動をしていたらいつもの日常は壊れなかっただろうか？

今の自分では予想もしていなかったからな、いやこの日常がなくな

るなんて

絶対無いと考えていた

突然俺の目の前が真っ白になった

バタンツ！

あれ、ここ何処？何でここにいるんだっけ？

えーと確か学校帰りでいきなり目の前が真っ白になって倒れた

んだっけ？貧血？それにしてもここ何処だろう？、辺りは真っ白だ

し、誰も・・・

「おい、起きたか？おいテメー聞いてんのか！」

「ねえーあっ君、優しくしなきゃダメだよ」

なんだこいつ等一人は言葉遣い悪いし、一人は優しいが・・・

「どうせ起きているだろ？」

「でも優しくしなきゃダメだよ」

「おゝい起きてんだろ、そろそろ起きないと怪我するぞ」

「怪我するのはヤダ、そしてお前等は誰だ？」

「初めて会って最初がそんな言葉か」

「お前に言われたくないんだけど」

「まあそれはいい、俺はだな悪魔だ」

「そして僕が天使です。よろしくお願いします、ペコリ」

ハア、悪魔？天使？何の冗談だ

「お前等何言ってるんだ？冗談は止めような」

「俺たちは冗談とか嘘とか言ってるだけ」

「えーとですね、僕たちは天使と悪魔の見習いでして、この下界で
実体化

するのは難しいくて、そして僕たちと契約してくれる人を探してい
て、それ

でめをつけたのが貴方です。契約させてください」

天使と悪魔と出会いと（後書き）

感想・誤字脱字・なおしたらいいところをどんどん送ってください
お願いします！

天使と悪魔と契約と

「契約してください」

ここまできたらあいつ等は天使と悪魔だと認めないといけないじゃないか、まあ面白そうだからいいか

「えーと契約って具体的にどうすればいいの？契約すると寿命が縮むことってあるのかな？」

「いえ寿命が縮むということはありません、契約って言ってもただ僕たちの前で『契約する』って言うだけです。」

「いいから選べ契約するのかわしないのか」

どっちがいいとか分からないけどどっちが面白いのかは分かる

「きまつたか？」

「ああきまつたぜ」

「おれはお前らと契約する」

「本当にいいんですね？」

「ああ」

「では、ここに契約したした証にこれを渡します、これをいつもつけていてください」

そう言われて渡された物は綺麗なペンダントだった

「では、私たちに会いたくなったら目を閉じて私たちに会いたいと願えば会えますから、それではおやすみなさい」

おやすみなさい？あれ？意識が遠のいてく……

バタンツ

「あれ？ここは俺のベッドだよな？ってことは今は夢？まさかの夢オチだったなんて……」

「そんなわけあるか！」

「あれ？悪魔の声はするのに姿が見えない？なんで？まさか悪魔じゃなくて幽霊だたりして」

「俺は悪魔だ！それより俺の声が聞こえるのは契約した事によってお前の意思の中に入り脳に直接話しているからだ簡単に言うてテレパシーに近いものだ分かったかくそガキ」

「ふう〜んなんだ夢だと思っていたのに、あとそれにさお前らのことなんて呼べばいい？」

「俺はなんでもいいぜ」

「僕も」

「じゃあ・・・天使が白で悪魔が黒でいい？」

イメージカラーを言ってみました

「まあいいぜ、べつに」

「うん、僕はいいよ」

「これからよろしくな白、黒」

「よろしくね達也君」

「よろしくな達也」

天使と悪魔と契約と（後書き）

感想くださいお願いします

あと改善点も

姉妹と幼馴染と俺と（前書き）

天使と悪魔と会う前のお話です。

姉妹と幼馴染と俺と

これは沢田達也さわただつやの少し前の日常です。

俺達也は全て普通だが一つだけ普通ではない異常がある。

それは姉と妹がブラコンだということだ。

二人とも美少女でかわいい、しかも血はつながっていない、そして二人とも所構わずデレデレしてくる、いいだろうらやましいだろうな、しかし所構わずだぞ街中で人がいっぱいいる所でだぞ二人の美少女が俺にデレデレしてきてそこらの視線や殺気やらが痛い。

そして今の状況は右に姉左に妹という状況で寝ているまさに両手に花だな。

ちなみに姉の名前は紅葉もみじ妹の名前が桜びんぐだ。

もうそろそろ起きてくれるかなと思っていたらちようど良く桜が起きた。

「あつお兄ちゃんおはよ、起きているなら起こしてくれても良かったのに」

「あーおはよ桜、今起きたところなんだ」

「そうなんだ、じゃあ私朝ごはん作ってくるね、お姉ちゃん起こすのがんばってね」

「あー頑張るよ」

なんで姉さんを起こすだけで頑張るのかというと姉が低血圧で朝に弱いからだ、だから朝ごはんは桜が作っている。何で親が作らないのかってそれは仕事の関係で海外にいるからだ。

まあそれはおいといて姉をどうやって起こそう。

?揺さぶる

?大声で『起きろ』とさけぶ

？脇腹をくすぐる

？あきらめる

さあどれにする？と？はやめとくか、姉さんはこちょこちょに弱いから？は起きる確立が高い
よしこちょこちょだ。

「こちょこちょーつと」

「ぐっすり」

「だめだこれもう無理だあきらめよう」

15分後

「お兄ちゃん遅いねどうしたの？」

「見ての通りお手上げだ」

「いいな〜お姉ちゃんばっかりお兄ちゃんとかっついて」

「しかたないだろ」

「しかたないけどさ、私とは全然くっついてくれないじゃない」

「じゃあこの姉さんをおこしてくれよ」

「じゃあお兄ちゃんさきにご飯食べていて」

「はい」

桜に言われたとおりご飯を食べていると俺の部屋から二人が出てきた

でもどうやって姉さんを起こしたのか聞いてみたい、前も聞いてみたけど「秘密」といわれた。

「おはよ姉さん」

「おはようたつくんキスしていい？」

「姉さん何でいきなりそんな恥ずかしいセリフ言えるの？」

「だってたつくんの事が好きだからに決まっているじゃない」

「私だってお兄ちゃんの事大好きだよ」

「こんな会話をしながらご飯をたべてる。」

「よし、学校行くぞ桜」

俺と桜は近くの中学校に通っている、自己紹介でもいったけど俺が二年生で桜が一年生だ。

姉さんは高校三年生だ、しかも中高ともに生徒会長をつとめていて支持率もかなりある、そして中学校で伝説つくってとにかくすごい人だと思う。

そして玄関を出てすこし歩くとある人が見えるそれは。

「おはようたつちゃん、ついでに桜ちゃん」

「ついでって何ですか、ついでって」

「ライバルだから、つてもあなたはたつちゃんと血はつながっていないとはいえ兄妹なんだから付き合ったりできないからおとなしくたつちゃんをあきらめておとなしくたつちゃんを渡しなさい」

「いやです、兄妹でも血が繋がっていないからまだ可能性はあります、あなただって幼馴染だからってお兄ちゃんに近づかないでください」

今桜がちよつと言ったけどこいつは俺の幼馴染の姫野彩音だ。ひめのあやね

なぜかいつも俺にまとわりつくなげだ？

「どうでもいいから、早くいこうぜ」

「「」どうでもよくない（よ）（です）」

こんな感じで登校をする、それにしてもにぎやかだなあの二人は。

姉妹と幼馴染と俺と（後書き）

もうちょっとこの話つづくとおもいます。

それまで、天使と悪魔の出番はないとおもいます

友と委員長と俺と（前書き）

書き忘れてましたが季節は4月で入学式が終わって一週間後ぐらいです。

友と委員長と俺と

「よー達也」

「あー幸輝おはよ」

こいつは俺の親友の榛葉幸輝（まきはな）

「やっぱりお前の周りって美少女が多いよな、この裏切り者」

「裏切り者？ ハアー何のことだ？」

「とぼけるなこのイケメン野郎！」

イケメンって言うならこいつのほうがイケメンだ。

「お前って本当に鈍感だよな、姫ちゃんとかいっぱいアプローチしてるのにな」

姫ちゃんとは、彩音の事だ。それより鈍感？ アプローチ？ 何の事だ？

「俺もモテたいな、そしてハーレムでもつくりたいな」

「お前には麗がいるだろう」

「やつの名前をだすな、震えが止まらねー」

「？」

麗（れい）とは、幸輝の幼馴染だ

「お前はあいつの事を全然知らないからそんなことが言えるんだ」

「ヤバくないか？ ちよつと涙目になってないか？」

「どうしたんだよ？」

「まずプールいって水着の女の人を見ると目潰しされるし、約束をほんのちよつとやぶったぐらくでスタンガンの餌食になるし、強制的に俺の休日を奪われるし」

「すごい災難だな」

「お前も大変なんだな」

「分かってくれるのか達也それでこそ俺の友人！」

「ああそれともう少して遅刻になるぞ」

「何故それを早く言わない？」

「お前の泣いている理由が知りたかったからだ」

「どうでもいいけど走るぞ」

そして俺たちは、走って学校に行きぎりぎり遅刻にはならなかった。

「ふー間に合ったー」

疲れた最後なんて全力だったからな

「あのー」

「っにしても疲れた」

「すいません達也君と幸輝君」

「あの坂もきつかったよな」

「あの！ あっスイマセン大声で言っつて、本当にスイマセン」

「それよりどうかしましたか？委員長」

何でコイツは話し相手が女子になると口調を変えるのだろう？

あと今委員長と呼ばれた人は、この2・Aの学級委員長の桃岸彩花。ももぎしあやか

「えーとですねー明日から登校時間が一時的に早くなるから8：10分だったのが

8：05になるから気を付けてっつていうのだけです。今日ぎりぎりだったから」

「ありがとうございます、委員長」

確かこれって遅刻ぎりぎりに来る人が多いから登校時間を早くしたと聞いたことがある。めんどくさいな。

「皆さん、今日は全校朝会があるので体育館に出てください」

と委員長が言っつのでしかたく行くことにした。

友と委員長と俺と（後書き）

誤字脱字報告・感想お待ちしています。

朝会と会長と俺と

しかたく立ち体育館にむかう。

「めんどくさいな」全校朝会なんてどうせ校長のくだらない話しを聞くだけだろ」

「でも今日は生徒会長が生徒会役員の決め方の説明をするらしいぞ。生会長だぞ」

「よし！体育館に行くぞ達也」

なぜ幸輝が喜んでいるかという会長に会えるからだ。この中学校の生徒会長であり、この学校の可愛い女子・お嬢様ランキング一位の人だ。もちろんファンクラブだってある、会長はこの学校のアイドルだ。

そんな事を思いながら体育館まで来た。まずは校長の話だな。

「一年生の皆さん中学校の生活にはなれましたか・・・」

20分後

「よくあんなに話せるよな」

俺の隣に居る幸輝が小さい声で話しかけてきた。

「まー次は生会長だからいいじゃん」

そして生徒会長がでてきた。

「えー皆さん中学校にはなれましたか？」

「さすが会長だな校長と同じ言葉なのにどうしてちがうかな」

そんな事を幸輝が隣いつている。

「今年の生徒会役員の決め方は立候補や推薦ではなく私が指名した人が生徒会に入ってもらいます」

へー今年是指名か誰になんだろう、やっぱり仲の良い人かな？

それともきちんと仕事をするメガネ君さな？ どちらにせよ俺とは関係ない。

「まず一人指名したいと思います、呼ばれたらステージの上に来てください」

いろんな所から『指名されるように』と聞こえる。これだけみんな一生懸命頼んでいると誰が指名されるか楽しみだな。

「私が指名する一人目は、2・A沢田達也さん、ステージに上がって来てください」

……ハア何の冗談ですか？

「達也さん早くステージの上に来てください」

「呼ばれているぞ達也」

幸輝は怒っているし

俺はしかたなく立ち会長がいるステージの上に行く、行く途中男子どもの殺気がすごく痛かった。

「あなたをこの鳳星^{ほうせい}中学校生徒会役員に選ばれましたがこの生徒会に入りませんか？ でも拒否権はありませんよ」

ひどいなこの人、それにしてもなんで俺なんだろう？

「質問なんです何が何で俺……僕が指名されたんですか？」

「良い質問ですね、それはですね、単純にあなたが好きだからですよ」

なんか俺の顔熱いよ、顔が真っ赤なのが自分でも分かるよ。

「え、あの一、えーと」

頭がうまくまわらない、自分でも何言っているのか分からない

「えーと達也さんが壊れたので今日の朝会は終わりです」

そこからは覚えていない起きたらそこは保健室だった。

「よつと何で俺ここにいるのだろう？ 先生いますか？」

「先生じゃなくて、私がいいますよ」

「えっ」

「もう大丈夫ですか？」

「なっなんでここにいますか？」

「なんでって心配だからに決まっていますでしょう、それにその人が好きな人とあらばほっておくわけないでしょう」

「え、あ、また好きって、何ですか？ こんなさえない普通野郎の事が好きなんですか？」

「なんでって、私と付きあってくれたら教えてあげますよ」

「汚いですね会長、それにしても俺……僕の事知っている事にビシクリしています」

「あつ敬語じゃなくてタメ口でいいですよ」

「じゃあ何で俺の事を知っているんだ」

「一目惚れとだけいっときます、それ以外にもあるんですけどね」

「一目惚れ？」

「はい！ それで話はそれますが生徒会に入っていただけですよね？」

「いやだって言っても拒否権なんてないでしょうし、入ってもいいですよ」

「やったーうれしいです、これからよろしくお願いします。付き合ってくださいなかつたのは残念ですが……」

「何か言いましたか？」

「いえ、別に……何も言ってますんよ」

「あつ、そうですか」

そんな訳で生徒会役員になりました。

朝会と会長と俺と（後書き）

感想・誤字脱字どんどん送ってきてください

初めての戦闘（前書き）

久しぶりの更新です。

初めての戦闘

あーほんの数日前は、普通の日常だったのに……。俺の意識の中では、天使と悪魔が話ししてるし……。俺の日常は、どこに行っただ……。今日も俺の新しい日常が始まった。

「まあ普通にしていればれる事は無いだろう……」

俺は、そう呟いて制服を着る。

「あれ、達也くんどこか行くの？」

「ああ、学校にね」

「学校ってあの人がいっばい居るところ？」

「いるけど」

「いや。楽しそうだなって思って」

「なら俺の中で見てるよ。見えるんだろ」

「うん！」

「んじゃあ行つてきます！」

そうして俺は、家を出て歩いたら……。

「お兄ちゃんなんで私をおいて先に行くなんてひどいよ……」

「すまん、すまん」

厄介ごとをおこさないためだ。こいつらが何をするか分からないからな。

「ひどいなー僕たちを信用してくれないんだー」

「いやお前は、信用してんだが黒がな……ちょっと」

「あ、今は大丈夫。あつくんは、朝弱いから」

「そうなのか」

「お兄ちゃんどうしたの？ 独り言なんて」

「い、いや何でもない」

「変なお兄ちゃん」

ふー危ない、危ない。

「声に出さなくても僕たちは、聞こえるから」

そうか。

『この子妹さん？』

ああそうだが。

「お姉さんもいるんだよね」

いるけど。

『いいな兄妹がいて』

シロには、兄妹がないのか？

『うん……でもクロが兄弟のかわりに僕と仲良くしてくれたんだ』
よかったな。

『うん、だから達也くんも仲良くしてあげてね』

ああ、分かった

「次は、黙っちゃっておかしなお兄ちゃん」

「俺は、普通だけど」

「ふーん」

桜と話したりシロと話したりしながら学校に行った。

めんどくさいな授業……。シロと話をして暇つぶしでもするか…

…。

『ダメだよ達也くん授業聞きなきゃ』

はいはい……。めんどくさいな。

先生こんなめんどくさい問題書くなよ。

そう思ってると急にシロが言ってきた。

『達也くん霊獣が出たよ早く行って』

でも今授業中……

『いいから』

さっきと言ってる事が違うけど。

『今は非常事態なの！』

分かったが、なんて言っただけから出ればいいんだ。

『適当に理由言っ出て』

めんどくさいな……。

「先生トイレ行ってきていいですか？」

「ああ、構わないぞ」

よし！ それで霊獣がいるのはどこなんだ？

『たぶん公園かな』

分かった。

「え？」

衝撃だった。すべての遊具が壊されていた。そしてそこには人間の何倍もの体の獣がいたからだ。俺は怖くなって足が竦んだ。

『おはよ』

おはよ……ってそういう状況じゃないから。

『それよりなんでそんなに恐れている』

そりゃあはじめて見たから。

『そうか、じゃあテン任せた』

『え、僕？ ひどいよあつくんは。達也くん力を抜いて』

俺は言われたとおり力を抜いたら一気に力が抜けた。不思議だ、体が勝手に動いてる。

「じゃあ達也くん任せてね」

俺の口でシロが喋った。たぶん俺の体をシロが操ってるんだ。

シロは弓矢をだして何発も連続で霊獣に矢を放った。その攻撃で気づいた霊獣はこっちに突進してきた。

「大丈夫」

そう言った後俺の背中から白い翼が生えた。そうして霊獣の突進を避けた。

「あつくん後は任せたよ」

『分かったよ』

するとさっきまで白かった翼は黒くなり、弓矢が鎌に変わった。

「一気にいくぜー！」

そのままクロは霊獣に突っ込んで霊獣を真つ二つにした。

「楽勝楽勝」

霊獣は消えて壊された遊具は元に戻った。

「お疲れ達也くん」

「俺たちがやったんだけどな」

「はははそうだな……」

バタンッ

意識がどんどん遠くなって眠ってしまった。

「やっぱり最初は体が慣れなくて体に負担がかかってたみたいだね」
「だな」

俺は起きたら自分の部屋で寝てたたぶんシロかクロが俺の体を使
って運んでくれたんだろう。それにしても疲れたな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780/>

天使と悪魔と俺と

2010年10月8日13時57分発行